

あとがき 上に掲げた輻射點の推算位置は、1941年冬、筆者が東京府立六中天文體觀測班回報誌上で論じた方法を、改良して行つたもので、元來、發表の意志等が無かつたのでありますが、山本先生から發表せよとのお言葉を頂きましたので、淺學も省りみず、仰せに従つた様な次第であります。そんな譯で、山本先生には種々御面倒をお掛け致しました。又、山本先生、小横先生からは有力な御高見を頂きました。末筆で御座いますが、謹んで御禮申し上げます。又同好の畏友富田弘一郎氏からは、筆者の有たなかつた資料の便宜を得、星野實君からは、計算法につき、御助言を頂きました。合はせて、感謝致します。

一生懸命書きましたものの、その道の Expert と目される 方々が御覽になれば、氣が付かずに過した誤りや、考へ違ひも有り勝ちと存じます。そんな點は、何卒御教示下さいませ様願ひ致します。(1943—7—5記)

海 軍 と 天 文

海軍少佐 塚 本 明 一 郎 (講演筆記)

渺々たる洋上、または長距離爆撃行におけるわが艦、わが機の位置を絶えず正確に知るといふ事が、あらゆる作戦活動の基本となる。此の爲め太陽、月、星を觀測して、我が位置を確定しようとする天測員の苦心は、並大抵ではない。眞珠灣攻撃前、渾しない太平洋上にあつて“大作戦に狂ひを生じさせぬために、艦の位置を最も正確に測定せねばならぬ”といふので、自分も、こゝ二十數年間、修練してきた天測の腕を振つた。

天佑にも、夜明から上天気であつた。晝間は、じく々々灼けつく甲板上で、太陽と向ひあつて、六分儀に嚙りつき、夜は星を觀測して、一睡もしなかつたが、諸員のこの努力によつて、廣漠たる太平洋上において、正確な艦位置をつきとめる事が出來、従つて、現位置から、目ざすハワイまでの距離、方向が確定したので、母艦を飛びたつた飛行機は、示された方向へ飛翔した時、まさしく眞珠灣を翼下に見たのである。

マレー沖海戦の戦果も、敵發見の位置が正確であつた爲であり、支那事變劈頭敢行された南京への渡洋爆撃でも、天測によつて飛行機の位置を正確に知り得た爲めである。洋上に於ける自己の位置の確定が、如何に大切であるかは、空母と飛行機の關係で最も明瞭に示されて居る。

尙ほ、敵の空爆の危険を冒して前進する潜水艦が、天測によつて、自己の位置を知る爲には、海上に姿を現はすほんの間隙に瞥見した星に依つて、確定しなければならぬと言ふ苦心が絶えず拂はれて居る、(在實筆記者)